

東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設
基本構想策定に係る検討会議（第3回）議事録

- 日 時：平成28年10月24日（月）13：00～15：00
- 場 所：天神岬温泉しおかぜ荘大広間
- 参加者：別紙出席者名簿のとおり
- 要 旨：以下のとおり

1. 開会

2. あいさつ

文化スポーツ局阿部次長からあいさつ

3. 委員紹介

4. 事務局より報告

(事務局)

- アーカイブ拠点施設建設地が双葉町中野地区に決定したことに伴い、立地町である双葉町より復興推進課長の平岩邦弘氏、復興庁双葉町担当企画官の村川奏支氏が新たにオブザーバーとして就任。
- 3回実施予定だった検討会議について1回増やすこととし、11月下旬頃に第4回会議を開催したい。

5. 議事

(1) 報告事項 建設予定地について
事務局より資料1ページにより説明

■ 中野地区復興産業拠点の整備方針について

(オブザーバー 双葉町平岩課長)

- 中野地区復興産業拠点の整備方針について（資料1ページ左上）

復興シンボル軸や復興祈念公園の位置を考慮しながら、就業者のサポートと復興祈念公園等への来訪者のサービス提供拠点として、産業交流センター（仮称）を整備し、併せて産学連携施設を整備することとしている。

その周辺に事業再開や企業誘致の受け皿として、共同事業所や産業用地等を確保し、双葉町の働く拠点としていく。また、就業者等の憩いの場となる近隣の公園も花卉を植栽するなど、景観にも配慮していく予定としている。
- 産業交流センター（仮称）について
就業者や復興祈念公園の来訪者を対象としたサービス提供施設として会議室、研究室、講義、飲食店舗、診療所、宿泊施設、町民一時滞在施設、交際施設等の機能を想定している。また、津波被災地域であるということから津波に向けての機能を併せ持つものとして中層階の建物を想定している。町としては、基本構想の実現に向け、まずは復興祈念公園やアーカイブ拠点施設等、国、県との連携を図りながら中野地区復

興産業拠点整備に全力で取り組んでいく。

■ オブザーバーからの意見

(復興庁村川企画官)

- 現在、双葉町において、町づくりの将来像について検討してもらっているところ。この町づくりを生かす大きなサポート役となるのがこのアーカイブ拠点施設だと考えており、アーカイブ拠点施設と連動を図り、双葉町のまちづくりを進めることで、福島全体の原子力災害からの復興というものを極めて象徴的に打ち出すものが出来ていくのではないかと考えている。
- また、将来のまちづくりを考えた時に、施設の維持管理等におけるランニングコストを考えないといけない。そういう中でアーカイブ拠点施設や産業交流センター等がお互いの施設を生かしながら運営していくことが、いい形での運営、また県や町におけるランニングコストを抑えるという意味も出てくると考えており、そういう連携を図りながら拠点整備を進めてほしいと考えている。

(福島県まちづくり推進課大竹主幹)

- アーカイブ拠点施設との連携について、アーカイブ拠点施設は、複合災害の復興の記録、教訓、未来への警鐘、世界の共有の場ということで、特に原子力災害を含む複合災害の情報発信拠点ということで議論されている。一方、復興祈念公園については、追悼・鎮魂のための広場的なものとして整備されるので、こうした役割分担をそれぞれしっかり行っていくことが大切であり、必要な情報を共有しながら、計画を進めていきたいと考えている。

【各委員からの意見】

- 双葉町の説明では、建設予定地の双葉町中野地区には、様々な施設、例えば産業、研究施設ができるとのことだが、アーカイブ拠点施設の周辺には、普段、どのような人がいるようになるのか。除染に関する事業者であれば、研究者が多いのかそれとも作業員が多いのかで雰囲気も変わってくると思っているので、ある程度、方向性は統一した方がいい。
- アーカイブ拠点施設、復興祈念公園、産業交流センターを含め、連携について、計画段階からしっかり、話し合わないといけない。そのためにもまとめ役をつくった方がいいと思う。
- アーカイブ拠点施設の中に飲食店などが入ると、地元で営業をしようとしている商工業者さんが二の足を踏んでしまうと思う。
- 今までは、アーカイブ拠点施設単独で考えていたが、産業交流センターが双葉町にできるのであれば、同じものを両方に整備することがないよう、アーカイブ拠点施設と産業交流センターが連携して進めていかなければいけないと思う。
- 今日実際に現地を視察して思ったことが大きく2つある。1つ目が、それほど土地が広くないということ。視察の最後に周辺を回り、ここに何があり、何ができるか等

について説明を受けたが、土地割で考えると、アーカイブ拠点施設の場所としては、そんなに広い範囲じゃないと思った。この施設は、修学旅行とか、そのような団体が来ることを想定していると思うが、大型バスなどの駐車場も考えないとならない。予定されている土地の広さだと、建物、収蔵庫、その他広場的なものを合わせると、土地があまりないのかもしれないと思った。

しかし、今日の説明だと、産業交流センター等と連携を図りながらになると思うので、駐車場は、共有すれば、クリアできると思う。

ただ、一方でこのバリアフリーの時代に、あまり離れたところに駐車場を設けて高齢者の方が不便にならないようにしてほしい。

- もう1つは海に近いということ。本日の資料の中にもあったが、津波被害にあった範囲であるので、津波対策を初めとする将来の災害に対する備えは必要になると思う。この辺も基本構想の中で検討いただきたい
- 中間貯蔵施設の近隣にできるとのことで、中間貯蔵施設もアーカイブの1つとして採りいれるべきと考えるのは、われわれの考えであって、他から来た人が同じように受け取るかどうかについては、真剣に考えなければならないと思う。緩衝地帯として、緑地帯が整備されると思うが、そこについて、きちんと国側に、アーカイブ拠点施設、産業交流センターなどの建物がある復興拠点と中間貯蔵の境は見えないようになるのか確認してほしい。自分自身は、見えない方が安心だと思うので、県民なり、国民の安心というものを考えていかなければいけないと思う。

(2) 展示・事業活動の方針と展示ストーリーについて

事務局より、資料2ページにより説明。

【各委員からの意見】

- 資料2ページの6のところ「世界初となる帰還への挑戦」とあるが、ここは現在進行形で進む復興の部分が展示等に反映されていくと思う。これからいろいろなデータが動いていくと思うので、ここの展示は固定的なものにせず、刻々と変わっていく現地の状況をうまく取り込めるようなものにしていかなければいけない。
- ただ、ものを並べれば良いというだけでなく、人の思いなどに焦点を当てた展示ストーリーを整理してもらえたと思っている。
しかし、難しいだろうと思うのが、展示ストーリーが、1、2、3、4、5、6と流れているが、例えば県民の思いの記憶と記録というのは、原子力災害への対応の部分にも関わってくるし、長期化する原子力災害への対応の部分にも関わってくるなど、分けることができない部分があると思う。
- また、原子力災害については、まだ、結論が出ていないので、例えばピンチをチャンスと書いてあるが、それは、まさにこれからの私たちにかかっていることだと思う。
ピンチをチャンスに出来ていない町や村が何年先になるかわからないが、このアーカイブ拠点施設の中で、リアルタイムに発信できるような展示になればいいと思う。
- アーカイブ拠点施設には、2つの目的があって、1つは避難されている方の心の拠り所となること。それは今の方達だけでなく、後世にもつながるような心の拠り所にすべ

きであろうということ。それから2つ目は、未来に向けてのアーカイブということ。

- この施設に来れば、震災以前のこの地域に元々あった人々の暮らしを感じることができる施設になれば、外国人の方が来たとき、ここで起きたことについて、実感・共感できると思う。
- プロログの部分について、ここが、この施設の肝だと思っている。このように（資料2ページ展示ストーリー）整理されると、プロログという言葉がものすごく簡単な導入部分に見えてしまうので、ここがこの施設の結論という位置づけで、もう少し、分かりやすく整理してほしいと思う。
- 双葉郡以外の人達が、自分たちのことについて語れるものがないと、参加することなく、忘れていってしまうおそれがある。福島県全体でそこで何があったのか。例えば郡山市民が来館した時、当時あったことについて、共感できるようなものがないと、いずれは双葉郡の未来に向けての部分だけが更新されていき、その部分だけを伝える施設になってしまう気がする。
- プロログの内容について、おそらく6番目（世界初となる帰還への挑戦）の部分がどんどん膨らんでいくと思うが、ここについては、帰還を果たす前の状況についてもきちんとしてほしいと思う。
今日現地視察で確認した、黄色い花が1面に咲いている、一瞬きれいに見えるあの風景は、何も手を付けることができている全てを語っていると思う。今後復興が進めばその状況も無くなると思うが、そこには、何もできずに人々が様々な思いを持っていたという歴史になると思うので、帰還を果たす前の状況についてもきちんとしてほしい。
- アーカイブ拠点施設が双葉町中野地区にできるということなので、双葉郡の方々に伝わるような、こういう施設があつて良かったと思ってもらえるような施設を目指すべきだと考えている。どこに作っても同じものができたというのではなくて、まさにこの地域に作ったからこそ、伝えることがあると思うので、そういったことが発信できるかと思っています。

(3) 県民参加の流れと実施内容について

事務局より資料3、4ページにより説明。

【各委員からの意見】

- 理念の統一、仲間づくりについて、福島県の学校、特に双葉郡の学校で、被災地について学べるカリキュラムを作してほしいと考えている。これから育っていく若者が、普段の学習の中で学ぶことができ、そして学んだことをアーカイブ拠点施設の中で生かせるような仕組みを作してほしい。
- 双葉郡の学校の生徒の中には、被災地のことをもっと知りたい、学びたいと思っている生徒がいる。そういう若者の育成を教育と兼ね合わせながらやっていくことが理念の統一や仲間づくりの部分に該当すると思う。
福島県の子どもたちはまだトラウマがあり、なるべくそういうものに触れさせない方がいいという大人の感覚で、遠ざけようとする傾向もあるが、それはこの仲間づくりにおいて、話し合いながら、うまく兼ね合いが付けられれば良いと考えている。

- ボランティアとして参加することは1つの生きがいになると思うが、多くは退職された人生経験豊かな方たちが行っている。そういった方達だけではなくて、アーカイブ拠点施設専属のガイドや案内人のような人を育成することも必要だと思う。
- 様々な企画ごとに募集し、来てくれるボランティアだけでなく、統一した専任のガイドを養成すべきだと思う。施設全体をきちんと説明できるガイドの養成することで、誤解のないアーカイブ拠点施設の姿を見てもらえると思う。
- イメージとしては、オリンピックや万博のコンパニオンのようなもの。誇りをもって、アーカイブ拠点施設の説明ができるような人がいると、行ってみたいと思う人はいると思う。
- ボランティアだけで運営するのは難しいので、きちんとした組織を作り、その中でいろいろなボランティア団体が下に位置していくのがいいと思う。
- 施設を設置したら、その後は、ボランティアに任せて、専任の事務職は1人しかいないような状況はよくないと思う。きちんと県が責任を持ってこの施設の目的や意義を説明できるような、そういうスタッフを揃えていかないといけないと思う。
- 資料3ページにあるアーカイブ拠点施設の4つの視点の展示プレゼンにおいて、今からスタートと書いてあるが、この図だけが独り歩きすると、3.11以後のことしか考えていないと思われる。震災以前についても丁寧に記載してほしい。
- 福島の復興に関わりたいと思っている若者はかなり多いと思う。そういう学生が夏休みの研修等で、ボランティアとして福島にきてもらい、しっかり学んでもらい、将来、福島において就職し、たとえ、それ以外のところで就職したとしても、責任を持って、今の福島の正しい現状を発信できる若者を育成していくことが大切。この準備期間において、そうした仕組みを整備することが必要だと思う。
- 語り部やボランティアガイドなどと、若い人との関わりをたくさんもてるような提案を行ってほしい。
- 福島大学にも、地域復興を支援するセンターがあり、また授業でも災害復興支援学など、復興に関わる授業を震災以後行っている。大学との連携については、COC+という自治体と大学間で連携をして卒業後に学生の地元定着を目指していくという事業を、福島大学、日本大学、郡山女子大学などと県を中心に進めている。
そのように、大学との連携を通じ、若者が被災地で活動し、復興の手助けをしていけるような機能がこのアーカイブ拠点施設に入ってくると、より活性的な中身になってくると思うので、お考えいただきたい。
- 学生など、若い世代を呼び込んで活動をしてもらう場合には、町内に安く泊まれる施設があった方がいいと思う。単なるホテルではなく、ボランティアや学生が来て、安価で活動の拠点にできるようなものをこの地域の一角に作ってもらえれば、来やすくなると思う。
- 連携という言葉も出てきているので、アーカイブ拠点施設にはできないものを町やその他の復興祈念公園などの施設で補ってもらえればいいと思う。
- 福島の産業を、新しいネットワーク作りを行いながら、興そうとしている方もたくさんいると思うので、浜通りの方に限らず、いろいろな方が福島の将来に向けて発信でき

るような施設になってほしい。

- 展示ストーリーに則って、話を始めてしまうと、被災された市町村だけが関係者のような形になってしまうので、できれば、いろいろな方に関わってもらい、例えば会津に避難した浜通りの方がお酒や焼きものなどを再興したなど、県内いろいろな方が、そういう新しい動きも含めて、福島県民ががんばっている姿を発信できるようにしてほしい。
- アーカイブ拠点施設だけではなく、復興祈念公園を含め、エリア全体を語り告げるようにしないといけない。
- 2020年の開館目標まで、ボランティアの方達が、愛着を持って関わり続けようとするモチベーションを維持することは難しいと思う。各地でワークショップや、協議会、検討委員会などが行われているが、参加者は、年配の退職した方や学生が多い。多くの協議会やワークショップで計画ができて、実際に誰が主体となって行うかとなると、真ん中の世代（20代、30代、40代など）がいないと難しい。その世代が参加してくれるような仕組みをつくらないといけないと思う。
- 運営体制が大事になってくると思う。各委員の御意見を実現しようとする、相当な組織がないと難しい。そのあたりは、これからの検討だと思うが、やはりいい施設、いい活動というものを目指そうということになると、生半可な組織では難しいと思う。

6 閉会